

# かたりべ100

豊島区立郷土資料館だより 〈創刊100号記念号〉



「うみでおべんとうをたべるととてもおいしいです。」



「かたりべ」九号巻頭ページ

## 「おいしいおいしい、おもち」再説

「かたりべ」が一〇〇号になった。個人的なことだが、筆者が「かたりべ」巻頭（この頁）に初めて文を書いたのは、第九号（一九八七年六月）の「おいしいおいしい、おもち」である（写真右）。この年の特別展「さやうなら帝都 勝つ日まで―豊島の学童疎開―」に關係する記事であった。アジア太平洋戦争中、福島県鹿島町（現・南相馬市）に集団疎開した長崎第五国民学校（現・千早小学校）三年生の女の子が東京の家族あてに出した手紙のなかの絵を題材にしたものである。この絵は展示図録の表紙にも使わせていただいた。この後、学童疎開に関する記事は、「かたりべ」に何回か書いたが、多くが、この記事と同じようなモチーフとなっていることを、あらためて感じた。

この絵は、明治節（十一月三日、明治天皇の誕生日を記念した祝日）にもちを食べる前に正座しているところである。つつましやかながらも、おちついた生活ぶりが、うかがえる絵と文である。しかし、そこからは想像できないようなひもじさとさびしさ、きびしさが、その背後にはあった。このギャップを、展示や文章でどのように伝えるか、試行錯誤が続いている。あるいは、いったいなぜ、こうしたギャップが生まれるのか。

ところで、この手紙は、絵日記形式になっていて、「おもち」に続いて、「こないだ海へ行った」絵が描かれ（写真左）、「いまはたのしく、おべんとうをいただいているところです。うみでおべんとうをたべるととてもおいしいです。」と記されている。

“おいしい食べもの”は、疎開先からの手紙のなかで、いろいろなかたちで、くりかえし言及されている。学童疎開を考える重要な切り口の一つがここにある。〈この手紙をふくむ書簡と日記、回想は、『豊島の集団学童疎開資料集（2）』に収録されています。〉

（青木）

巻頭ページからもおわかりのように、郷土資料館だより「かたりべ」は、今号で創刊一〇〇号を迎えました。そこで、昨年の一二月九日に今まで編集・執筆に関わってきた歴代の学芸員五名が集まり、座談会形式で創刊からの二五年間のあゆみを振り返ってみました。

気心の知れた内輪のメンバーの集まりだけに、途中で話が大きくそれてしまう場面も多々ありましたが、それぞれが抱えている「かたりべ」に対するイメージの違いや、「かたりべ」をめぐる素朴な疑問、意外なこだわりも明らかになり、有意義で貴重な九〇分間となりました。

座談会出席者

- 橋口 定志 (文化財係学芸員)
  - 伊藤 暢直 (同 右)
  - 福岡 直子 (郷土資料館学芸員)
  - 横山 恵美 (同 右)
  - 秋山 伸一 (同右、司会・記録)
- 【二〇一〇年一二月九日、豊島区立勤労福祉会館内「研修室Ⅱ」にて】

以下、座談会の抄録とともに、「かたりべ」一〇〇号までの「小史」を記し、続刊となる一〇一号への足がかりとしたと思います。なお、編集担当側で一般の読者の方々へも内容が伝わりやすいように、適宜文言を補っていることをあらかじめお断りしておきます。

I 草創期の「かたりべ」(一〜一七号)

★「たより」としての体裁が整いつつあるものの、各号の統一性が未熟な段階

**秋山** 郷土資料館の開館は一九八四年六月、一方「かたりべ」の創刊は一九八五年で、この間約一年半の期間があります。このタイムラグはどのように理解すればよいでしょうか。「かたりべ」創刊までのいきさつも含めて教えてくださいませんか？

**橋口** 郷土資料館が開館して慌ただしい日々のなか、「調査報告書」、「研究紀要」、「資料目録」と刊行物を発刊していった。ところが、これらの刊行物はいずれも区民との接点が希薄なものであったため、区民向けの読み物を発刊する必要があるのではないかということで、

ようやく仕事も落ち着いてきたこともあり、準備に取りかかった。創刊号の編集担当は社会教育指導員(以下、「指導員」と略す)だった蔵持重裕さん(現立教大学教授)だったと思う。当時の学芸スタッフ全員が執筆し、区民の方にも原稿を寄せてもらい、季刊で出そうという方針で準備を進めた。巻頭ページの題字部分と四ページの編集後記部分のデザインは蔵持さんが考え、私が墨入れを行って版下を作った。「かたりべ」というタイトルは、歴史を語り継いでいく拠点としての郷土資料館でありたいということと、区民と郷土資料館をつなぐ読み物にしたいという趣旨から、指導員の菊池勇夫さん(現東北学院大学教授)が発案したものと

記憶しているな。

**福岡** 「かたりべ」を初めて手に取った時、そのタイトルから民俗調査や聞き取り調査に限定した刊行物かなと思っただ。その後、郷土資料館が発行する読み物であることを知り、なるほどいいタイトルだなと思った。

**秋山** 収録する記事のこだわりとか工夫とかあったならば教えてください。

**橋口** 郷土資料館という所は実物資料を扱っているのだから、巻頭ページはモノ(生活資料や古い写真など)を紹介するような文章を書こうという方針にした。

**秋山** 確かに熊谷守一さんの書(一号)や終戦後のガスアイロン(二号)、戦時中のカルタ(三号)と実物資料の紹介が続いていますね。

II 充実期の「かたりべ」(一八〜四五号)

★「たより」としての体裁が整い、さまざまな記事・コーナーが現れる段階

**秋山** それでは第II期に入ります。編集時の思い出やエピソードを皆さんから披露してもらえればと思います。



「かたりべ」1号巻頭ページ

伊藤 「かたりべ」はこれまで、二四・

二五号と八五・八六号の二回合併号を出しているんだけど、いずれも自分が編集担当の時にあたり、何か複雑な気持ちだなあ。

秋山 二四・二五号の合併号の時は、たしか学芸員の異動に伴って仕事が重なってたいへんな時期だったんですよ。

伊藤 そう。急ぎよ「千川上水展」という特別展を担当することになって、他の業務に手がまわらなくなり、やむなく合併号として発刊した。ただし、ページ数はそれまでの二倍の八ページにしたけどね。

あと巻頭ページの題字部分の色づかいを変えて、橋口さんに怒られたことを

覚えている。

横山 それ最初に変えたの私だわ。伊藤さんが私の代わりに怒られたみたい(笑)。

伊藤 橋口さんに「一年で刊行する四号分それぞれ意識的に異なる色にしてあげる。」というように言われて…。

橋口 そんなの忘れたよ。

横山 私勝手に一八号で初めて紫色を使っちゃったの。そんな「四色のルール」があるなんて知らなかった…。

秋山 どこかの段階で伊藤さんから色の話を聞いていたから、業者への発注が復活した時に自分が編集担当だったこともあって、六六号からは「四色のルール」に基づいて業者に指定してきた。

この色づかいについては今まで受け継がれているよね。さて、話を戻して…。編集時のエピソードについて横山さんいかがですか？

横山 自分が編集を担当した号を見ると、カラーページを結構多くとり入れているなどという感じがする。

橋口 カラーページを入れられるようになってよかったね。自分たちが携わっていたときは、予算がなくてなかなか入れられなかったからね。

横山 私って新しいことをやりたがる性格で…。冊子の大きさをB5判からA4判に変えてしまったのもこの私です。もちろん会議ではかったうえのことだけど。

Ⅲ 「かたりべ」苦難の時代(四六〜六五号)

★区の財政事情が厳しく、業者への発注ができなかったため、色上質紙へデジタル印刷機を使って手刷りしていた段階。ただし、収録する記事に手抜きはなかった。

秋山 続いて福岡さんいかがですか？

福岡 思い出されるのは、「かたりべ」を業者へ発注する予算がなく、ちょうど手刷りの時に、オアシス(ワープロのソフト名)を使って版下(はんか)を作り、勤労福祉会館のデジタル印刷機を借りて印刷したことかしら。ところが、その機械の調子が悪く、そのような事情を郷土資料館運営委員会の場で話したところ、運営委員であった小学校の校長先生が自分の学校で新たに印刷機を買ったので使いなさいと言ってくれて、当時の館長とともに色上質紙を自転車の荷台に積んで印刷し、「かたりべ」の発行ごとに何度か繰り返し返したことが思い出されます。ただし、手刷りの印

刷だと写真がうまく出ず、人の顔だと本人に気の毒なので、なるべく人の顔が写っていないものを使うように心がけました。とにかく発行までに時間がかかったことをよく覚えています。今となっては楽しい思い出ですね。また、手刷りの時代に「かたりべ」は五〇号を迎えていて、その号だけ八ページになっていきます。「編集後記」を見ても記念号的な扱いにしていますね。

秋山 話の時期が少し前後するけど、4コママンガ「資料館の法則」の誕生について教えてください。ちょうど私が文化財係勤務だった時期に始まったので、その経緯を知らないんだよね。

横山 何号から始まって、誰が編集の時



二度「生まれてしまった」合併号



手刷り時代の「かたりべ」 62号からA4判になった

だっけ？

伊藤 三八号から始まって、その時の編集担当は横山さん…。

横山 エーッ！覚えてない。

伊藤 たしか、指導員の小林一岳さん（現明星大学教授）に「四コママンガ載せたら？」みたいな感じでうまく乗せられて、何となく描いたのだと思う。

横山 どうして伊藤さんの名前じゃなくて、「学芸プロ」にしたの？

伊藤 個人名を出すのがイヤだったので、「学芸プロ」の名前にした。「資料館の法則」というタイトルも自分で考えてつけたんだよね。

横山 初めのうちは内容もみんな考えていた。昼休み中のレファレンスで出前のソバがのびちやう話なんかね。

伊藤 そう、そう。この回が他区の学芸員仲間からけっこう反響をよんで、「じやナニ、これって、利用者が昼休みに質問してはいけないうってこと?!」なんて言われて（一同爆笑）、ちよつと困ったな。

福岡 そういえば、「資料館川柳」（四五号）というのもあったわね。

横山 私が編集担当で、次号からは手刷りになることがわかっていて、次の編集担当へバトンタッチする最後の号だわ。よく覚えてるわね。

福岡 「あー言えん、ストレスたまって、あー胃炎」とか…。あのときいっぱい作ったじゃない。

IV 「かたりべ」原稿「データ渡し」の時代、そして…（六六号）

★業者へ印刷発注する予算が復活し、現在へつながる段階。数年前からはCD-Rやメール添付でデータ原稿を業者へ渡すようになった。

秋山 ここまで「かたりべ」の号数を積み重ねてきて、橋口さんから見た時に、「かたりべ」草創期の頃と比較してどのように感じられますか？ いわば

「草創期の精神」は今なお受け継がれていますか？

橋口 いいんじゃないの…。自分たちが担当していた時は行き当たりばったりでやっていたけど、そうでなくなってきたことが読んでよくわかる。

横山 ただ、「かたりべ」も一時期停滞期みたいな状態があって、学芸員の調査・研究活動を速報で読者へわかりやすく提供するという側面が希薄になった時期があった。橋口さんが関わっていた頃の「かたりべ」は、体裁としては整っていなかったかも知れないけれども、各学芸スタッフの力量を感じることができて読み物として面白かった。

豊島区に入区して資料館に勤め始めた頃、まず「かたりべ」のバックナンバーを読んで、そのエキスを吸収しようとして、草創期の記事すべてが充実していたような気がする。いまだにレファレンスの時には、このころの「かたりべ」を使う場合もあり、決して色あせていないと思う。

伊藤 ここまでいろいろな連載があったけど、どれが一番続いたのか調べてみると面白いかも知れないよ。

横山 「地名シリーズ」とか、「江戸名所図会」のシリーズとか、「豊島を

さぐる」とか…。今までの総目次がないから、記事を探すのがたいへん。

秋山 「セピア色の記憶」も最近書いていない。

横山 編集担当になると、書きたい記事もなかなか書けないのよ。ただ、ページ数増やせば書けるのに、秋山さん五ページ以上にはしないんだもん。

秋山 どうも最近「まもり」に入っちゃっているようで…。すみません。

橋口 今までの「かたりべ」を合本して、総目次をつけたらどう？

秋山 じゃあ、まずは一〇〇号までの総目次を作って、一〇一号へ向けての最初のステップにしましょうか。（完）



座談会の様子（左から横山・福岡・伊藤・橋口・秋山）



「資料館の法則」初回。はじめのうちは、実際にあったこと、起こったことをネタにしていた

# セピア色の記憶

## 第25回 百貨店の街 池袋のゆくえ

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した一九六七年（松井一彦氏撮影・提供）と現在（二〇一一年一月撮影）の池袋駅東口の様子です。地図に示した\*印は撮影地点を、→印は撮影方向を示しています。

都電の車両が写っていると、どうしてもそちらに視線が行きがちですが、今回の主役はバックの建物の方です。今号は一〇〇号記念号ということもあり、「ひやく」にちなんで、池袋の「百」貨店事情について考えていくことにしましょう。

池袋駅東口で戦前から営業していた武蔵野デパートが西武百貨店と改称したのは一九四九年四月。これは東口のヤミ市が次々と取り壊されていく時期とちょうど



ど重なります。一方、池袋駅西口は、翌五〇年一二月に駅ビルを完成させ、東横百貨店が営業を開始しました。続いて五年には京都を本拠とする丸物百貨店と、東口駅前の三越百貨店の進出が具体化し、この時期の池袋は、いわばデパートラッシュ現象に見舞われます。

こうした状況に対して危機感を抱いた地元商店街は、特に丸物百貨店の進出に反対を唱えます。しかしながら、反対運動の立ち遅れ等もあり、百貨店の進出をおさえることはできず、一九五七年一月に三越が、一二月には丸物が開店し、まさに「百貨店の街 池袋」の様相となります。

さて、上の写真で二両の都電の背景に



ある大きな建物は、左側が西武百貨店（西武・東武（横）百貨店については、本誌七八号で取り上げています）、右側が縦書きの「MARUBUTSU」の看板が印象的な丸物百貨店です。その後、丸物は一九七一年六月に閉店し、同年一月に専門店街からなる池袋パルコとなり現在に至っています。

右下の写真（豊島新聞社提供）は、一九五七年に撮影された建築工事中の三越池袋店の様子です。「三越池袋支店新築工事」という看板が掲げられ、その上部に



鉄筋がどんどん組み立てられている段階です。三越池袋店は、二〇〇九年五月に五〇余年の歴史を閉じ、店舗改装ののち同年一〇月よりヤマダ電機が営業しています。なお、三越池袋店の正面玄関脇にあったライオン像は、墨田区向島の三囲神社境内に移築されています。かつて、「百貨店の街」と言われた池袋は、最近では「家電の街」と言われることがあります。数十年後の池袋は、果たしてどんな街になっているのでしょうか？

（秋山）

※本欄は「豊島区史 通史編3」（一九九二年発行）の記述を参照しました。

# 郷土資料館からのお知らせ

## ★「春の収蔵資料展」開催のお知らせ

三月三十一日(木)までの会期で開催しています。むかし使った生活用具、羽子板、絵馬など盛りだくさんです。以下、主要なコーナーの内容、展示資料についてお知らせします。

### ■豊島区の村絵図をながめてみよう

江戸時代の「駒込村絵図」(原本)をはじめ、「雑司谷村」、「菓鴨村」、「池袋村」、「下高田村」の複製村絵図を展示しています。江戸時代における豊島区域の道・河川・寺社等の位置関係を確認してみましょう。

### ■番付さまざま

「番付」とは、相撲・芝居などの人名

を階級や順序に沿って記した一覧表のことを言い、江戸時代の摺りもの文化のうちのひとつです。ここでは、相撲・芝居の番付に見立てて作った番付である「見立番付」を中心に展示しました。

### ■こけしー温泉地のみやげものー

こけしは、江戸時代の文化文政期(一八〇四ー二九)に温泉地の土産物として生まれたと考えられています。ここでは、東北地方の伝統的なこけしを展示しました。

\* \* \*

### ■「お正月の風物詩ー絵馬・羽子板ー」、「むかしのくらしと家電製品」のコーナーがあります。ぜひご来館下さい。

## 区民のための

## 博物館用語の基礎知識

### 図 デジタルアーカイブ (digital archive)

博物館、美術館、公文書館、図書館の収蔵資料や様々な文化資源などをデジタル化して、保存等を行うこと。資料のデジタル化は、結果的に原資料へのアクセスを減らすことにつながるため、資料保存の観点からも注目されている。もともとアーカイブは、公文書・古文書、あるいは(公)文書館のことを指していたが、最近では拡大解釈して使用されることが多い。

### ▽用例△

学芸員 A 「鈴木家から寄贈を受けた火鉢って、収蔵庫のどこに置いたっけ？」

学芸員 B 「うちの館自慢のデジタルアーカイブで検索して探してくれない？ 私の頭はアナログなの…。」

## 編集後記

非常に寒い毎日が続いています。皆さんいかがお過ごしですか？ 少し間があきましたが、「かたりべ」100号を発刊することができました。ここまです五年間、ほぼ季刊のペースで刊行し続けることができたのも、本誌読者および郷土資料館利用者の皆さまのご愛顧のおかげです。この場を借りましてあらためて御礼を申し上げます。

最後に、創刊100号記念として景気づけに謎かけをひとつ。

「かたりべ」100号とかけまして、北海道の観光名所「摩周湖」と解く、そのところは、どちらもキリ(霧)が良いでしょう。【学芸プロっち】おあとがよろしいようで。(秋山)

## 資料館の法則 学芸プロ 27



かたりべ  
No.100

2011年1月25日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4  
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/>